

## 大学入試の基礎知識 vol.13 【国公立大学入試の仕組み】

国公立大学に合格するのは私立大学より難しい。そんなイメージはありませんでしょうか？高校のパンフレットにも、まず「国公立大学合格〇名！」なんて実績をアピールしていますもんね。でも入試の仕組みを理解して、自分の特性にあった入試形態を利用すると、意外と有名な国公立大学に行けることも。何となく難易度が高そうなイメージがありますが、もしチャンスがあるならチャレンジしてみましょう！



2023年度、文部科学省資料より

### 一般選抜

多くの国公立大学で大学入学共通テスト(共通テスト)と各大学で実施される2次入試を合わせて合否を判定しています。2次入試は、共通テストの自己採点の結果を踏まえて出願します。前期、中期、後期と3回受験するチャンスがあります。前期入試で合格して入学手続きを行うと中期、後期を受験することはできません。(厳密には入学資格を得ることができません。)

中期は公立大学がメインとなっています。また募集定員の約8割が前期に集中しているので、第1志望は原則として前期で受験する場合があります。

### 一般選抜での受験科目

基本的に6教科(国数英理社に加えて情報)・8科目(理系では数学と理科が各2科目、文系では社会2科目・数学で3科目)といったパターンが多くなっています。しかし調べると文系で数学・理科を課さないなど少ない科目で受験できる大学もあります。

### 学校推薦型選抜

国公立大学全体で9割以上が学校推薦型選抜を実施しています。私立の指定校推薦に比べると、かなり募集人数が少ないのが現実です。また小論文やプレゼンテーション、口頭試問などに加え共通テストを課すところもあります。また「評定平均4.0以上」など出願基準の高いところもあります。

### 総合型選抜

9月から10月に出願、11月前後に実施されることが多いので、一般選抜と両方を受験することも可能です。また出願資格も学校推薦型選抜よりも緩やかな場合が多いです。

選考方法は1次で書類審査、2次で面接やプレゼンテーション、小論文といったパターンが一般的です。ここを突破して合格というところありますし、そのあとに基礎学力を測るために共通テストを課す場合もあります。その場合、共通テストの合格基準は一般選抜よりも低い場合がほとんどです。

総合型選抜では「英語関連の有資格者」「全国コンテストの入賞者」といった条件がつくこともありますし、書類の準備にも時間がかかります。受験生にとっては負担の小さくない入試です。しかし、受験することで合格のチャンスは増やせます。ただ軽い気持ちで受験しても合格の可能性は低いでしょうし、一般選抜の準備時間が少なくなり準備不足で入試に臨むといったことになってしまっは元も子もありません。早い段階で希望する大学・学部の募集要項を確認して、しっかりと準備をして臨む必要がある入試形態と言えるでしょう。